

水リスクと企業



グローバルウオータ・ジャパン代表
(国連テクニカルアドバイザー)
よしむら かつなり

吉村 和就

▶7

世界中の企業が、いま多国籍企業の進出や出資が活発化している。ミャンマーが注目される理由は、天然ガスや石油など豊富な資源を有しながら、アジアの最貧国に甘んじてきたミャンマーだが、民主化の動きを受けて欧米、中国、韓国など

か、6千万人以上の人口、勤勉な国民性、さらには2大消費市場の中国とインドを結ぶ戦略的要衝

ミャンマーの水資源

ミャンマーの大半は熱帯性気候に属し、水資源は豊かである。季節は夏季(2月中旬〜5月中旬)、雨季(5月中旬〜10月中旬)、乾季(10月中旬〜2月中旬)に分かれ降雨量の差が大きい。また南の方は雨量が多く(平均年間降水量2千

表流水(貯水池)が9割で、残りが地下水に頼っている。

水道の整備状況

全国ベースの水道普及率は37%で、無収水率は(収入にならない水)は60%を超えている。その理由は高い漏水率(約50%)と盗水である。供給されている水道水も殺菌

水されている。残りの3分の1は緩速ろ過法にて浄化しているが、薬品消毒は行われていない。ミャンマーでは水道水は直接飲まないのが常識であり、水道経営に必要な額の料金徴収が行われていない。地方においては水に対価を支払う習慣がないところもあり、水道事業者を悩ませている。

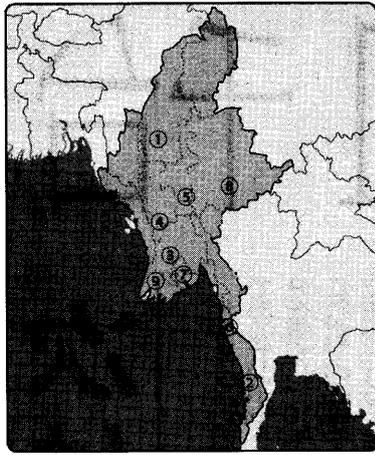
民間企業への水供給

製造を目的とする企業ならば、工業団地に入ることになる。全土に大きな工業団地が9つ建設されているが、電力や水インフラが完備されている工業団地は少ない。例えば電力の供給では、ミャンマー全体での供給能力は、総需要の約50%であり、発電所の建設が急務である。さらに水力発電割合が総発電量の74%を占め、乾季には都市部でも1日数回の停電があり、工業団地では、終日停電の例もある。電気が来なければ水も供給できないのが現実である。日系企業が工業団地に入る場合には、停電が少なく、大きな貯水池を持っているかなど自らの現地調査が不可欠である。

ミャンマーの水環境

ミャンマーの工業団地

- ① ザガイン管区
- ② タンダーリ管区
- ③ バゴー管区
- ④ マグウェ管区
- ⑤ マンダレー管区
- ⑥ モン州
- ⑦ ヤンゴン管区
- ⑧ シャン州
- ⑨ エイヤワディー管区



整備遅れる上下水道 水質汚濁も年々悪化

に位置しているからである。水資源は豊富だが、国民の命を守る水道供給は全国的に未整備で、ミャンマー最大都市のヤンゴン市(約510万人)でも水道のカバー率は60%に過ぎない。

ミ、ヤンゴン周辺が穀倉地帯である一方、北部では水が不足し農業用水の開発が必要である。水の用途は全体の89%が農業用水で、生活用水(貯水池)を利用して

ことから、住民は断水や低い給水圧、時間給水に悩まされている。1日3時間未満の給水は約4割に達している。

都市部の下水道整備率が20%と言われている。都市部の下水道についてヤンゴン市内の場合、英領時代の配管が使われているが漏水が激しく川に到達する前に汚水が地下浸透しているケースが多

い、その3分の2は浄水処理を行わず直接給

比較的高いものの、水道